

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功 の



美術館の時間
は
いつも
静かな
空気に
包ま
れてい
ます。

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その89 楽しさ広がる「アートの日」勉強会

燕が巣をつくっています

県立近代美術館が入る建物には、向かって左側にトンネルのような通路があるのはご存じでしょうか。トラックも出入りできる搬入路となっています。通口もありますので、職員は毎朝そこを通って自分の持ち場へと急ぎます。

その搬入路の天上近くに、この春も燕が巣をつくっていて、えさをねだる雛がかわいい鳴き声を聞かせてくれます。天上から糞が落ちてきますので、警備員さんが古い雨傘を逆さにつるして防いでくれているのもなかなか霧囲気です。雛は日々成長していますので、もうしばらくすると巣立ちを迎えるのでしょうか。

それはさておき、四月から六月にかけて、近代美術館は「美の饗宴展」が三万人を超える入場者でにぎわいました。所蔵作品展は「特集 徳島ゆかりの美術」が終わり、六月三日から「特集 現代版画」がはじまっています。

毎月この欄で、近代美術館の催しを紹介していますが、月一回の連載では書き切れないことも少なくありません。今月も、

ぜひ皆さんに紹介したいと思う催しがありました。美術館と保育士さんたちで取り組む「アートの日」勉強会です。

保育所との連携の広がり

以前、徳島市の保育所と連携がはじまったことに触れましたが、その活動が広がっているのです。近代美術館では、子どもたちの美術館見学と、職員の出前授業を交互に行う、「アートの日」と名付けた活動を行っています。最初は、美術館に近い保育所からはじまりましたが、子どもたちにも保育士の先生方にも好評で、いまのスタッフの数では対応できないほどの人気となっています。

そこで今年度は、先生方と美術館でいっしょに運営する勉強会をつくることにしました。これまでどおり、美術館見学や鑑賞の出前授業などで美術館職員が対応するほか、勉強会で先生方が刺激を得たことを保育所に持ち帰って実践できる流れをつくらうとしたのです。保育士さん中心の勉強会ですので、交流によって楽しいプログラムが生まれるのではないかと楽しみにしています。

その記念すべき第一回目の「アートの日 勉強会」が、六月八日の夕刻から美術館のアトリエで開かれ、徳島市内だけでなく遠方からも保育士さんが集まってくれました。参加希望の申込みが多く、同じ内容の「勉強会」を二回に分けて行います。

第二回勉強会のメインの活動は、「えのぐであそぼう」。仕事を終えて集まってくださった先生方の熱気が、美術館のアトリエいっぱいになり、私も元気をたくさんもらうことができました。

描く子どもに寄り添う

実習の前に私は、鑑賞と表現のつながりについて、短くお話をさせていただきました。保育士さんから、「鑑賞では楽しく意見が交わっているのに、お絵描きの時間には萎縮してしまう子がいる」という悩みを伺ったからです。まわりの子の絵が「じょうず」に感じられ、「自分には描けない」と思う子がいるのです。私は、次のようなことをお話ししました。

「じょうず」という言葉に、大人の見方、評価基準が伝わっている面はないでしょうか。ひょうとすると家庭などで、写生がうまくできた絵が褒められる

場面があつたのかもしれませんが。美術館では、先日まで「美の饗宴展」が開かれており、写実的な作品の前で、「写真みたい」と驚く声がよく聞かれました。しかし、西洋のバロック時代からはじまる三百年間の絵画を順番に観て、一九世紀まで来ると、点描や筆触を活かした印象派の作品が目に入ってきます。バロックの頃と比べると、荒い表現なのですが、色彩の明るさや筆使いのリズム感など古い時代の作品にはない魅力が感じられます。人によって好みはあるでしょうが、作品を見比べるとそれぞれのように気づかれます。

ですが、子どもの絵の評価では、なかなかそうならないのはどうしてなのでしょう。一つには、急いで子どもの成長を見ようとする気持があるからだと思っています。いまではよく知られていることですが、幼児は、グルグルと線を引くなぐり描きの時期から、頭足人といって、頭から足が生えている人物を描く時期、胴体が描けるようになる時期へと進んでいきます。それぞれ大事な成長の過程ですので、その時々で、しっかり認めてあげることが大事です。飛び越

えるように急いで指導すると、四歳、五歳の頃からお絵描きが嫌いになりかねません。

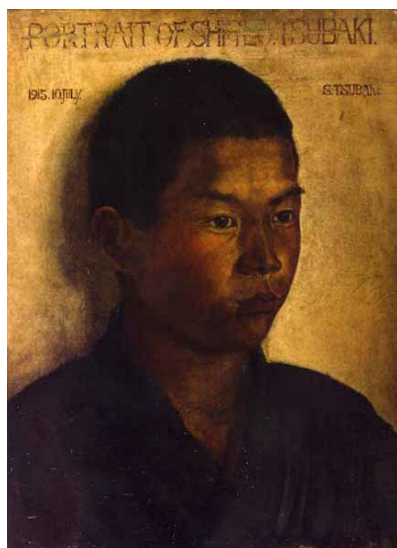
もう一つ大事なものは、「なぐり描き」、「頭足人」といった、描かれた作品の形式から判断するのではなく、子どもの描こうとする思いに耳を傾けることです。幼児は語りながら描くところがありますので、お話をよく聞き、描く子どもに寄り添ってあげば、子どもは自信をもって自分を表現していけるようになると思うのです。

面白がつて活動する

絵を描くとき、運動会や遠足のようすなど、写真に撮ったような形を脳裏に思い描くと、



所蔵作品展で展示中（7月26日まで）
上、カンディンスキー 版画集〈響き〉5. 叙情的 1911年
下 橋貞雄 弟茂雄像 1915年



大人の人も、イメージどおりにいく人は少ないはず。しかし実際の制作は、材料や技法の違いによって、出来上がりは大きく変わりますし、試行錯誤するなかで、「このような絵にしよう」というイメージはどんどん変化していくものなのです。

「上手でなければならぬ」というときの「上手」とは、絵のよさの一部分に過ぎませんので、上手さを硬く考え過ぎると、自由な気持ちをしぼってしまいます。ですが、イメージを途中で変化させていいことを知れば、少し楽になり、自分が開放されたように感じられます。

この日の勉強会の本番は、亀井幸子企画交流室係長による、さまざまな材料によるお絵描きの実習です。紙も画用紙だけでなく、いろいろなポスターを

切ったものなど、厚みも素材感も異なる紙が用意されました。絵具も多様で、洗剤の界面活性剤の力で、ビールにも、梱包用の「プチプチ」にも描けるようにしました。

テーマは「夏を描こう」。描くときには、「どれだけのしく、おもしろがつて活動できたかを大切に」「上手、下手は関係ない」、「今までやったことがないようなことにチャレンジする」などの条件がついていきます。たとえば、「好きな色は使わないとか、ぜったいこんな色は使わない」という色を使う、「失敗を失敗と思わず、おもしろがつてみる」などがチャレンジの例にあげられました。

アトリエ中が熱気にあふれました。色チョークを削り、木工用ボンドとまぜて絵具をつくる先生、梱包材「プチプチ」に色を塗っている先生もいま洗剤を泡立ててふくらみ

のある色をつくったり、紙を貼り合わせたり、ほんとうにみなさん個性的でした。洗剤の泡でコップに入ったビールをつくった先生も楽しそうでした。

「保育所で子どもたちとやってみよう」という感想がずいぶんありました。描くことの楽しさが、多くの子どもたちに伝われば、絵を描くことが苦手な美術嫌いの子は絶対に減っていくはず。

そういえば、「アートの日」で学んでいる四、五歳児が、家族を美術館につれて来ることがあります。受付で「亀さん先生いますか?」と職員を呼び出すので、親が引き気味になっていると、「先生」とあいさつして、展示室で作品鑑賞をしていきます。家族は本当にびつくりしたそうです。それも、一人や二人の話ではないのです。「アートの日」によって認められ、楽しい経験をするので、美術と美術館を楽しむ人が増えていくのだと思います。

7月の催し

■所蔵作品展2015「特集 現代版画」26日「日」まで

テーマで知る名品「版画芸術の見方、味方」5日「日」展覧

会場、竹内利夫(当館学芸員) ことも鑑賞クラブ 11日「土」、展覧会場

■開館25周年記念フィギュア展「プレワークショップ」

「ガラスで作る小さなヒトガタ(第1回)」26日「日」と8月9日「日」のセット、徳島ガラススタジオ講師、小学4年生以上、応募締切…7月14日「火」、抽選

■7月に応募締切の講座(8月開催のプレワークショップなど)

・「ドルハウスに挑戦 ケーキコース」8月1日「土」と2日「日」のセット、藤坂恵(日本ドルハウス協会公認講師)、中学生以上(保護者同伴不可)、参加費…千円、応募締切…7月21日「火」、抽選

・「ガラスで作る小さなヒトガタ(第2回)」開催日…8月6日「木」と20日「木」のセット、講師等は第1回と同じ。応募締切…7月23日「木」

・「美術館で宿題そうだん会」開催日…8月7日「金」、8月9日「日」、小・中学生、応募締切…7月24日「金」、抽選

・「文化の森でがらくたアート」8月8日「土」、西山欣子(イラストレーター)、応募締切…7月27日「月」、抽選

★くわしくは当館ホームページか、当館(☎0888-668-1088)まで。